

特集：2009年度日本数学会出版賞受賞者のことば

高瀬正仁氏

昨年の暮れ、日本数学会出版賞の受賞のお話をいただきました。まったく思いがけないことで驚いたのですが、日本におけるヨーロッパ近代の数学史研究のこれまでの経緯のあれこれが瞬時に回想されて感慨があり、ありがたくお受けしました。推薦していただいた方と数学会のみなさまに心より感謝し、御礼を申し上げます。筑摩書房の「学芸文庫 M&S」も同時に受賞とのお知らせをうれしくうかがいました。ビートたけしさんと同じ賞をいただくことも愉快でした。数学は数学的自然を観察する学問と思いますが、その数学的自然は人がクリエイトしてはじめて生まれるのですから、物理や化学のようなサイエンスとは違います。30年の昔、岡潔先生の論文集に教えられてそんなふうを考えるようになり、ガウスやオイラーなど、ひとりひとりの偉大な数学者たちの事蹟をたどり始めました。一番はじめに取り組んだのはガウスの作品『アリトメチカ研究』でした。それから日々古典を読み続けて30年になりますが、当初から思い、今またあらためて思うのは、近代数学史の森を完全に読破するのは不可能という一事です。オイラーの全集は80巻ほどに達してなお未完成、ラグランジュ全集は大冊が14巻、ガウス全集は12巻14冊。言うは易く行うは難し。ひとりではとても読み切れそうにありませんが、古典に直接学ばなければ数学の正体はつかめないという確信は揺るぎません。志を同じくする後進の出現に期待し、ともに学ぼうではないかとの場を借りて広く呼びかけたいと思います。

高瀬正仁